

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 6 1 号

平成 1 9 年 5 月 2 0 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

神谷美恵子著作集 第 5 巻「旅の手帳より」(7)

古典を読みなさい

たった 1 冊を推薦せよと言われても各分野にそれぞれの古典があるのだから困るけれど、西欧文化を深く理解しようとするならば、キリスト教とならんでその二大源泉の一つであるギリシアの世界に一度は浸って見る必要がある。ホメーロス、プラトーン、ソフォクレス、そのどれも捨て難い。でもどうしても 1 冊というならばプラトーンの『国家論』をとることにしよう。透徹した思索とともにずいぶん詩的な要素も含まれていて決してとりつきにくい本ではないし、現代に生きる私たちにとってもどれほど身ぢかなものを含んでいるか、読んでみてきっと驚かれるであろう。

亡父前田多門を語る（１）

一高に入ったときの校長は新渡戸稲造先生でした。…親は無いと思っていた父。それが新渡戸校長との出会いから、精神的な親を恵まれた、といった感がした。そういう意味感覚が父を強く支配した。父は新渡戸先生を師匠としてだけでなく、生みの親のように敬慕し、先生の家庭に入れて貰って書生のようなことをしていた時代もあります。

ちょうどそのころ、私の母となった田舎娘がやはり先生の眼中にありました。母は7歳のとき、父親を失い、母の母は針仕事をして5人の子供を育て上げた未亡人でした。その貧しい家庭に育った母は女学校の時、東京のクエーカーの普連土女学校に給費生として引取られ同校を卒業したのでした。新渡戸先生は同じクエーカーであったので、この女学校とも関係が深く、先生は母にとっても父親代りのような存在でした。このような廻り合わせから父と母とは先生のお引合わせで結婚することになったのでした。従って新渡戸先生は私共の家庭にとって祖父のような存在で、私たち弟妹は先生に頼をさわられては可愛がられ、妹の勢喜子は先生の母上のお名前を頂戴して名づけられたのです。父も一生の間、いつも新渡戸先生のお心に添うような生きかたをしたいと念願しており、後年国際関係の仕事に多くの力を尽くすようになったのも、先生の感化の現れと思います。

この外、父は内村鑑三先生からも深く影響を受け、先生門下生たちが造っていた柏会に入っていたために多くの良き友人に恵まれました。愛生園30周年記念式の時(35年11月)こられた田島道治前宮内庁長官は終生変わらぬ親友でしたし、その他、岩永祐吉(同盟通信創立者)、南原繁、矢内原忠雄両元東大総長。高木八尺東大名誉教授。関西で無教会主義の伝道を続けられている黒崎幸吉先生。多くの優れた先輩や後輩の方々のお名前がすぐ思い浮かびます。

亡父前田多門を語る（２）

父は内村先生と新渡戸先生と、どちらからも深い感化を受けましたが、どちらかというとな新渡戸先生の方に、自身にないもの、自分に最も欠けていると自覚したものが先生には存在する、自分に欠けているところを先生に見出して、これに強く惹かれたのではないかと思います。新渡戸先生は温い慈愛と広い包容力、それに深い悲哀の心を持った方でした。父は自分にも他人にも厳しく清濁あわせ呑むといった工合には行かなかった。それを先生は正して下さったようです。沢山の人、いろいろな人、その人はそれぞれの道を行くのだ。理想に到達するにも種々の道があるのだ。そのような考え方、心の持ち方を先生は教えて下さったようです。聖書ヨハネ伝 14 章の「我が父の家には住家(すみか)多し」という句が父は殊に好きで、この句に初めて接した時、自分はほんとうに救われたと言い、一生の間、しばしばこの句を口にしておりました。

父は若いころは学者になりたかったそうですが家が貧乏で許されず、東大の独法科をでて内務省に入り、やがて地方に廻されて郡長とかなんとか、転々と移ってました。兄は群馬県で、私は岡山市で生まれたような有様。その後(大 9・12 12・6)後藤新平氏が東京市長になられた時、第 3 助役とされ...そのうち新渡戸先生が国際連盟の事務局次長としてスイスのジュネーブに長年滞在され内外人の信望を一身に集められる時代がやってきました。先生のお考えによつてか、父も...国際労働機関(I L O)日本政府代表としてジュネーブに約四カ年滞在することになりました(大 12・7 - 15・9)。進取の気象に富む母は父と共に当時は 4 人であった子供たちを連れて渡欧しました。時に私は小学校 4 年生。ゾロゾロ子供を引っばって任地に着いた時、新渡戸先生も驚いた。ソナナに沢山子供を連れて来て、日本の恥になるようなことを仕出かすようなことがあっては困ると言われ、母は泣きそうになったとのことでした。

亡父前田多門を語る（3）

父は一生涯をかけて病氣らしいことをしたことがない人であったので、老年になり次第に体力が衰えて来るのが中々つらかったようで、「年を取るのは難かしいことだ」ともらせていました。7年前に母に死別してからは、一層淋しくなり、新渡戸先生や母の属していたクエーカーの宗派に加わったのです。その理由の一つは、このキリスト教の宗派は瞑想的な傾向を持ち、東洋の宗教に対して理解と寛容、及び敬意を有しているから、とっておりました。晩年になるに従って生来の孤独、厭世的、思索的、観照的、諦観的といった傾向は深まったようです。しばしば関西方面に講演に旅し、ついではと私の家に泊り孫たちと角力などして戯れたあと、帰京に際してはほとんど必ず京都に廻って古い寺を訪れるのが楽しみのように仏教も尊敬したようであります。最後に死の床に持参して行った本を見ると、聖書と共に親鸞聖人の歎異鈔がありました。

...最近私の弟が寄こした便りに次のような言葉がありました。「親爺の心持や考え方の一つ一つ、それは親爺が自ら、血みどろになって闘い取ったものだった。アンナに力一杯、人生を生き抜いた人は無かった。親爺が社会的に偉い人であったのは誰にも判っているが、併しそれは別にアンナにいつも苦しんで真面目に正直に、そして哀しく闘っていた。それが判ってくれる人は少ない。」この言葉はよく父を理解した言葉でありましょう。これにつけても思い起こされるのは、軽井沢にいた頃です。ある時フト独り言のように私に言った。「自分は役目とか地位の上に乗っかって、いい気になっていることがどうしても出来ない人間だ。惰性だけではどうしても生きて行けないように出来ている。だから中々大変だよ」と。確かに大変だったでしょう。けれどもそこにまた、父の精神の絶えざる進歩と、そして若さ。この源泉が存したと考えるのであります。

いのちのよろこび

ありがとう わたしの目よ
すでに老いたる額の下でなおも澄んだまま
はるかにきらめく光を眺めうるを。
ありがとう わたしのからだよ
疾風（はやて）やそよかぜにふれて
なおきりりとしまり おののきうるを。

ベルギーの象徴派詩人エミール・ヴェルハーレン（1855 - 1916）は「よろこび」と題する詩の中で、こんなふうに自分の目に、手に、指に、からだに、つぎつぎと感謝のことばをのべている。人のからだにそなわっている生命の働きによって、自然の美にひたりうる幸せを、このように素朴に歌いあげた詩を、わたくしはほかに知らない。

もしかするとこの詩人は「すでに老いた」からこそ、こんなにも切実にこのよろこびを感じているのかもしれない。人は何かを失うか、または失いかけているときにこそ、そのものの尊さを、なおさらに身にしみて知るものようだ。

視力を失った人たちは、花のかおりや空気のおいで、季節のうつりかわりをとらえ、その味わいをめでて、詩や歌によむ。また他人の声音（こわね）だけにたよって、相手の心のようすをおどろくほどに敏感に感じとり、そこであたたかいものにふれれば、ぱっと顔が明るくなる。...

文明の進歩は、いいものを沢山もたらしてくれはしたが、はっきりすると、だれにも与えられているはずの、大切な生命の働きを弱め、そこから来るよろこびを奪い去るおそれがある。自動車は自分の足で歩いたのしさを忘れさせ、スモッグはみどりの木々を枯らし、星の光をもかき消してしまう。美しいものに接して心をおどらせる

機会は、都会では少なくなった。

使命感の特徴

以上の例からみても、使命感というものの特徴がわかる。何よりも目立つのは、使命感に生きる人の生は、ある目標にむかって、強く統一されている、という点である。そういう人は気を散らさず、あることにむかってこつこつと、根気よく歩いて行く。障害や困難が途中にあっても、不安におそわれても、何とか乗り越えていく。

『星の王子さま』のサン＝テグジュペリの考えでは、人は小さな自分を何か大きなものにささげることによって、自分の生命をそのものと交換するのだ。ささげればささげるほど、自分は小さく「無」になって行くけれども、自分をささげた対象によって、限りなくゆたかになって行く。サン＝テグジュペリがその遺稿『城砦』の中でくりかえし述べているこの「交換」の思想は深いものをもっている。

ささげる、ということ、いかにも気負っているかのように聞こえる。たしかに使命感に生きる人は、みな努力家の一面を持っているが、べつの面では、ただ「そうせざるにいられないからやる」という面をそなえている。必ずしも利益や結果を期待してのことでない、「無償性」である。

生きがいを求めて

私たちはお互いに時処を同じくして生きている人間同志として、生きがいを与え合う生活でありたいものです。自己を疑い、他人を疑い、生きがいを失った人生はさびしいものです。毎日の生活の中で、相手をはげまそうという気持ちを持ちあうことが根本であって、その心さえあれば、制度や事業は、自然に形をとって行くものだと思います。われわれ人間にとって、人生のかなりの部分が自らの心の姿勢を変えることによって、変化させ向上させることが出来るものだという事は、私どもに生きてゆく勇気を与えてくれます。そして、まず、人間としてこの世に生を享けたことに対する感謝の念が根本であり、これこそ生きがいの前提となるものであることを申し上げて、私の話を終わりたいと思います。(伊丹高校育友会における講演)

(講演のあとの座談会の中での発言)

何のために生きているのかということは、哲学の一番根本的な問題の一つです。その答えを、私がここで言って、それを聞いて判るというようなものではないでしょう。それは又、普遍的な宗教の問題でもあります。私がここで特に「普遍的な」とことわるのは、従来ある既成宗教の何かを指すのでなく、もっと本質的な意味で、宗教の求めるものという意味なのです。ですから、この問題は、一体世界のすぐれた哲学者、宗教者は何と答えているかを、自分でたずね学んで、考えるべき問題でしょう。

「ハリール・ジブラーンの詩」より（５）

宗教について

神谷美恵子訳

ある老いた僧侶が言った。宗教のお話を、と。
彼は言った。
今日私が話したことは
それ以外のことであったでしょうか。
宗教とはすべての行為（おこない）と思惟（かんがえ）ではないで
しょうか。
行為と思惟でないとするならば、
それは魂の中にたえずほとばしり出る
畏敬と驚異の念ではないでしょうか。
手で石を切り刻んだり
はたを織ったりする間にも
それはほとばしり出るものだ。
信仰を行為からひきはなすこと
信念を仕事から別けることなど誰にできよう。
眼の前に自分の時間をくりひろげて
これは神のため、これは私のため、
これは私の魂のため、こちらは私の体のため、
こういうふうに言えるひとがあろうか。
あなたの時間はすべて翼のようなもの。
空間の中をはばたいて
自己から自己へと飛んでいくものだ。

よそいきの衣をまとうように
自己の徳をまとう者は裸でいるほうがよい。
風も太陽もその皮膚（はだ）に穴をあけはしまい。

倫理によって自己の行動を決める者は
歌う鳥を籠（かご）にとじこめてしまう。
もっとも自由な歌は
牢獄の中からひびいて来はしない。
礼拝をまるで窓のように思い、
開けたり閉めたりする者は
自分の魂の家を訪ねたことのない者だ、
その家の窓は曙から曙へと開かれているのに。

あなたがたの日々の生活こそ
寺院であり、宗教である。
そこに入るとき、何もかもたずさえて行きなさい。
すきも炉も槌もリュートも、
必要あって作ったものも
たのしみのためにこしらえたものも。
なぜならじっと瞑想している時も
自己の業績よりも高く昇ることはできず、
自己の失敗よりも低く墮ちることはできないのだ。
またすべての人びとを連れて行きなさい。
なぜなら礼拝するときも
人びとの希望（のぞみ）よりも高くは飛べず、
彼らの絶望よりも身を低くすることはできないのだ。
神を知ろうとしても
それゆえに謎を解くものとなっではいけない。
それよりもまわりを見まわしなさい、
すると神が子どもたちと遊んでいるのが見える。
また大気を仰ぎなさい、
すると神が雲の中を歩き給うのが見える。
いなずまの中でみ腕をひろげ
雨とともに降りて来給うのが。

あなたはまた見るだろう、
神が花の中に微笑み、木々の中で
み手をあげさげし給うのを。

（神谷美恵子先生の解説）

ジブラーンの詩と思想の大きな特徴の一つは、それが宗教的なものに浸透されていることです。それならば彼は宗教をどう考えたか、ということが、読者にとっても大きな問題となるでしょう。...

ここで見られる宗教とは、日常生活の全体にしみこんでいるもので、特別な時や所に限られたものではないことがわかります。ジブラーンの考える神とは大自然の中に姿をあらわし、すべての人の日々の営みの中に息づく、大きな、自由な神であることがうかがわれます。